

一般社団法人日本社会福祉学会  
第69回秋季大会報告

第69回秋季大会 実行委員長 都築 光一(東北福祉大学)

2021年の日本社会福祉学会第69回秋季大会は、口頭発表も含めた初の完全Web大会として、去る9月11日～12日の両日にわたり開催されました。実行委員会は、足かけ3年におよぶ大会開催に向けた検討が、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けてしばしば中断せざるを得ない状況におかれました。しかし学会の役員や事務局の皆様を始め、多くの関係者からの助言や励ましを受け、700人弱の参加を得て大過なく開催できましたことは、実行委員長として感謝と同時に大きな喜びとするところです。

大会の運営に当たっては、Webのシステムを、9月11日については学会事務局を中心に、9月12日においてはシンポジウムを学会事務局、口頭発表と特定課題セッションは開催校の東北福祉大学、ポスター発表は昨年同様E-ポスターとして実施しました。

開会に先立って、研究支援委員会によるスタートアップ・シンポジウムをオンデマンドで開催しました。「研究テーマの育て方について考える」をテーマに、学部から大学院へ進学した会員、現場に従事しながら大学院生として学んでいる会員、大学教員等として勤務をスタートした会員から、様々な環境下において研究を進める方策について報告がありました。報告いただいた皆さんとコメントーター並びに司会者に感謝申し上げます。

初日の午後から開式となり、学会賞授賞式が挙行され西崎緑氏、平野隆之氏の2人の会員に学術賞が、田中智子氏に奨励賞が贈られました。おめでとうございます。

この後、大会校企画シンポジウムとして、「死から生を見つめる福祉～改めて生と死から社会福祉を捉えなおす～」をテーマに開催いたしました。はじめに基調講演として、「生きる意味を問うー「死んだら何もかも終わり」を駁す」と題して北海道大学名誉教授の宇都宮輝夫氏の講演がありました。このあとシンポジウムに入り、社会福祉の現場からの報告、地域における自死予防活動の実践報告、宗教家の立場で東日本大震災における活動報告をそれぞれ得たあと、コメントーターのコメントを得てソーシャルワークの展開を中心に議論を深めました。報告いただいた皆さんとコメントーター並びに基調講演の宇都宮先生に感謝申し上げます。

2日目は、口頭発表と特定課題セッション並びに留学生と国際比較研究のためのワークショップ、学会企画セッションが開催されました。国際学術交流促進委員会による留学生と国際比較研究のためのワークショップは、「コロナ禍における国際社会福祉研究・教育活動」をテーマにオンデマンドで開催され、コロナ禍におけるソーシャルワーク研究の事例報告やソーシャルワーク教育などのほか国際比較研究などについて議論がなされました。特定課題セッションでは、ジェンダーをテーマとしたセッションにて4報告、災害福祉に関して5報告がなされ、それぞれのセッションにて検討を深めました。午後は学会企画セッションとして、「社会福祉学における研究方法論を考える～量的研究と質的研究の背景にある考え方を探る～」をテーマに、社会福祉学における量的研究や質的研究における基本的な考え方、あるいは、量的研究や質的研究で明らかにできることや、その限界についての議論を行いました。コーディネイターの先生に感謝申し上げます。

口頭発表は、全体で83報告(この中には、中国、韓国から参加された方の分も含まれています)で

このうち82報告が成立いたしました。全体統括者並びに司会者の皆様に、改めて御礼申し上げます。またポスター発表は、全体で39件の報告がなされました。

今回の大会は、コロナ禍での研究大会の開催で、今後に向け幾つかの課題を挙げるができると思われま。第一に、口頭発表やポスター発表数が例年に比較して少なかったことが挙げられます。コロナ禍において、研究活動が大きく制限された結果と思われました。実践を基盤とする社会福祉研究においては、研究活動が制約されることによる影響が大会に如実に反映したと思われま。第二に、会員同士の情報交換や交流の機会がほとんど持てなかつた点です。例年ですと、会場の各所で歓談する会員の姿を目にすることができたところですが、こうした機会が無かつたことは、やむを得ないこととはいえ誠にさみしい限りでした。第三に、大会の準備や当日の対応が全く様変わりしたことです。そのため過去の経験はあまり参考にならず、直近に開催された幾つかの他学会の開催方法を参考に、本学会の大会運営方式に適用しながら大会運営委員会に相談しつつまとめていきました。開催校における物理的な負担は、かなり軽減されたと思われま。第四に、Web大会となつたことで参加費を大幅に低減でき、交通費も含めて参加者の経済的負担感を軽減できたことです。遠方の方や若手研究者さらには大学院生の方々には、利点となつたのではないかとと思われま。

研究大会という場で、会員同士の情報交換や親睦交流の機会を持てなかつた点は、やむを得ないとはいえ残念であつたと思われま。一方で、多くの会員の皆様が参加して成果を報告する場の確保という点や、様々なセッションにて議論をすることができた点などは、Webという方式であっても地方の会場においても問題無く運営できたのではないかとと思われま。今後、充実した大会とするために、多様なあり方を検討できればと思われた大会でした。